

## 桃園会より20歳以下のみなさまへ

自分が二十歳の時は何を考えていただろう。十代の頃はとにかくもてたいという気持ちと、強く見せないといじめられてしまうという恐怖心、結局、激しくいじめられてしまったわけだけど、それだけだったかもしれない。二十歳の頃の生活を具体的に思い出してみると、朝から夕方まで焼肉屋でアルバイト、まかないで焼肉が食べられるともくろみ、見事に毎日ハラミを食べていた。夕方から喫茶店で読書、この頃に本を読み始めた。中学生の頃に、好きな子が図書委員という理由で図書室に通ったことはあったが、実際は『ウォーリーをさがせ!』を毎日していた。約一時間、夢中で本を読んで、夜は演劇の練習。ちなみに初めての読書体験は司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』、坂本龍馬気分で毎日を過ごしていた。そして、週末は観劇。金曜日一本、土曜日二本、日曜日一本の週四本、この生活を二、三年は続けたのだろうか。もちろん、お金がなくなる。微々たる焼肉屋さんのお給料は全て観劇に消え、家では、劇場でもらったチラシをベッドに、もっばらお好み焼きを食べていた。キャベツはかろうじて入っていた記憶がある。観劇と豚肉を天秤にかける毎日、それでも幸せだった。いや、幸せなんだろうかと考えることなどなく、ただただ夢中だったんだと思う。そんなわけで、チケット代、五百円です。もしこの時代に、私と同じように演劇に魔法をかけられてしまった少年少女がいまいたら、ぜひ劇場に遊びに来てください。

橋本健司

### 桃園会第49回公演 『ふつと溶暗～断象・ふかつしげふみより～』

【作・演出】橋本健司

【日時】2017年 2月11日(土) 19:00 / 12日(日) 12:00 / 16:00

【会場】アイホール 伊丹市伊丹2-4-1 TEL:072-782-2000

【料金】20歳以下 500円

(受付にて20歳以下であることを示すものをご提示ください。ex:学生証)

一般前売 2,500円 / 一般当日 2,800円

【ご予約】<https://www.quartet-online.net/ticket/toenkai49>



### 《あらすじ》

これは、演じるとはどういうことか、役者とはどういう存在か?というお芝居です。

演劇のコトバは誰かの書いた言葉です。

誰かの記憶と思考を役者が演じることで世界に問いかけていく作業が演劇だとするならば、

役者はその誰かを失った時、何を語ればいいのでしょうか?

桃園会主宰の深津篤史は肺小細胞がんで2014年7月31日にこの世を去りました。

劇作家であり演出家であった彼は、5年にわたる闘病生活の間も意欲的に作品に取り組み、多くのコトバとともに目を閉じれば臉に浮かぶ素晴らしい作品を劇団に遺してくれました。

劇団員の橋本健司は、なぜか亡くなる一日前に深津への過去形の手紙を書きました。

まるで彼の死を願うかのように。

闘病中の深津を一番近くで支えてきたのは自分なのに。

「どうしてそんな事を書いたのだろう。」

物語はいつまでも消えない心のしこりを抱えたまま、劇団員二人を連れて、

深津のコトバを手掛かりに銀河鉄道のようなものに乗るところから始まります。

ファーストキスの思い出は、ほろ苦い青春の1ページ。

幼少期に妹と遊んだ記憶は、「永訣の朝」を境に旅立った劇団員への思いと交差する。

病床に伏してから交わした母との会話は、彼の最後の作品である『覚めてる間は夢を見ない』

と重なり、劇団員が記した「世界の終わり」につながっていく。

時空を超えて役者の体を通してあらわれる数多のコトバは、

最期まで口にはできなかつたあるコトバにたどり着く。

役者が役者であることで見えてくる世界は劇場にあふれるコトバとともに、

大切な人を亡くしても前に進む小さな一歩を後押ししてくれると信じています。

劇を締めくくる暗闇は、決して終わりを意味するのではなく、

次の劇を始めるための暗闇なのかもしれない。

耳を澄ませば、列車は走り続けています。

今回の劇は、私たちがのる、ちょっと恥ずかしい言い方をすれば、

人生という列車そのものなのかもしれません。

